

いっしょにみる・きくガイド

振り返りトーク



話し手 | 白鳥建二 (全盲の美術鑑賞者、写真家)
天羽絵莉子 (特定非営利活動法人 Art's Embrace 理事)
高橋賢次 (恵比寿新聞編集長)
三好大輔 (映画監督)
門あすか (東京都渋谷公園通りギャラリー)

見て、話して、変わるイメージ

一同：おつかれさまでした
白鳥：いや～本当ね、だって午前中 100 分やって、午後 90 分なので。本当に疲れたと思います
一同：(笑)
高橋：でも、あつという間でした、僕は
一同：うんうん
白鳥：いや、早かった
三好：そうだね。(午後も) 2 時間近くやってたね
高橋：でも、体感は 1 時間くらいだね
ああやって集中して見ると、いろんな見え方がするということ、言語化することによって、自分にまた戻ってくるから、なんだかどんどん変化していくというのが、おもしろかったですね
三好：他の人たちの視点もあるから、そういうふうに見えるのか、ああ確かにそう見えるということもあるし、これだけ集中して見るということが本当になくから、けっこうエネルギーを使い果たした感じですね
白鳥：今日はけっこう止まらなかったね、みんな
門：会話がね、続いた。ずっと
白鳥：で、次から次へとイメージが変わってって
高橋：それが多様な方がおもしろいんでしょうね。こう見えていく、ああ見えていくってということが
白鳥：うん
三好：シシャモに見えていたのが、足に見えてきたり
一同：(笑)
門：けっこうみんな見立てが好きでしたよね
高橋：作家から感じるバイブレーションというか、そういうのも話していくうちにだんだん変わってくるというか。その人の特徴なんだ?とか
白鳥：ああ!
高橋：ああ、思いなんだ。とか。そういうのもあって、おもしろいなと思って
・・・
門：不思議だなと思ったのが、私は制作方法とかも見たり聞いた

りして知っているの、正解的なものを知ってるんですけど、みなさんが作品から想像して言ってるのが、初めはぜんぜん違う…みたいなきも、その後話し終わるころには言い当てたりするのがすごい!って思いました。
一同：(感嘆)
白鳥：え?どれなんかはそうなの?
門：平瀬さんの描き方とか
白鳥：どのやつ?
門：VとかX(バツ)とかナミナミって話していたあれは、一方だけを見て描いているわけじゃなくて、絵を回しながら描いていたらしいんです
一同：ふーん…
白鳥：あ!一か所だけじゃないんだ
門：はい。だから「横向いてる」みたいな話になったときに、「(ああ、わかるんだ)」と思った
三好：ずっと見てるとね、それが見えてきたりしてあれ?タイトルなんだっけ?
高橋：海苔じゃないですよ
白鳥：違う違う
一同：(笑)
高橋：タイトルなんだっけ?
白鳥：タイトルなんだっけ?
三好：タイトル見た?
白鳥：見なかったのか、あれは…。うん
一同：(笑)
門：素敵な鑑賞のしかたですね。作品に惹きつけられて、タイトルを見るのも忘れてしまう
三好：忘れてしまったね
門：あとは、西岡さんの音符の話とかも
白鳥：うんうん
門：すごい観察力だな、と。みなさんの。線の引き方まで想像されていたのが、かなりおもしろかったです
高橋：絶対に音符(や楽譜)の最後が丸くなるというね
白鳥：ハハハハ
高橋：こう描いて、「ああ、もう終わるんだな」って、気持ちが感じられて
白鳥：あれ、いいよね

高橋：最初はめっちゃ尖ってる
白鳥：あれはよかったよね
三好：あの人のスタイルなんだろうね、きっと
門：ひとつの作品からそこまで（深く）鑑賞して、そこからさらに他の作品まで読み込んでいくというのが良かったですよ
三好：あの曲を聞いてみたい
白鳥：（笑） そうだよ。あれ、絶対元ネタあるよね？
三好：ありますよね
高橋：やっぱり聞きながらやってるのかな…？
門：あ、音楽も聴かれるとは聞いているのですが、もともと模写というか、楽譜をかたわらにおいて、それを見ながら描いておられるので
白鳥：も、模写じゃないよね？
門：（笑）
白鳥：模写じゃないよね。あれはね。模写じゃないけど、参考にすることはあってということだよ
門：それを作品から逆に読み解いたのが、すごい。どういうふう
に制作しているかまで、たどり着いたのがすごいなと思いました

作品から広がるイメージ

天羽：一つの作品を見ていると、同じ作家さんの他の作品も見たく
なるというか、「ああ、これはこういう意味だったのかな？」
とか、それをあらためて「じゃあ他のはどうだろう？」みた
いな。というのは今回すごく多かったです
白鳥：うんうん
門：よかったです
三好：一個一個の作品が好きになっていくというか、ね。ああ、こ
の人の考え方どうなんだろう？とか、こういうふう
に描いていたのかな？とか想像しながら見ると、別にね、そんなに
大きな関心をもってなくても。その人の作品が、なんかいい
なって
門：うんうん、うん

白鳥さんに伝える

高橋：言語化して、白鳥さんに伝えるというのが、すごいおもしろ
かったです。
みんなこれを聞きながら作品を見るんですよ？
門：そうですね。（録音した音声を） どういうふうに編集しようか
な？と思っているんですけど…作品を説明をされているとき
の、説明の仕方がおもしろかったですし、（吉川敏明《イーゼ
ルとタマネギ》1981年）玉ねぎの話なんて、「ええ！玉ねぎ
だったの！？」と驚くところは、絶対、聞いてほしいと思
いました（笑）
白鳥：あれはタイトル、だれがつけたんだろう？って感じだよ
（笑）
門：うーん…、施設の人だったりすることも…

白鳥：ね。そうだよ
門：（そういう）ときもあるし
白鳥：いろいろ、いろいろなんだよ。そのタイトル、玉ねぎもどこ
から来たのかなというのは、本当はわかんない（かもしれ
ないよね）。タイトルだけでもおもしろい
高橋：（岡元俊雄の作品が）男の人だと思ったのに、女の人って
白鳥：（笑）
高橋：ね～。でも女の人と言われると、女の人に見えてくるという
三好：ああ、たしかに
高橋：言葉のマジックってやつだよ
白鳥：そうそうそう
三好：やっぱり…思い込みで見ているというのがよくわかるよね
高橋：ね
高橋：だから最初からタイトルを見る必要はなかったんでしょ
白鳥：うんうん。
高橋：そこで精一杯作品を見て、いろんなイメージをふくらませ
て、最後に「タイトルなんだっけ？」みたいな
白鳥：うん
三好：やっぱり最初にタイトル見ちゃったら、どうしてもそっちに
引っぱられちゃうもんね。
白鳥：そうそうそう

共有できるよろこび

ああ、それでいいんだ

高橋：でも、そこに正解はなくて、なにか正解探じゃなくて、
「あ、そこまで拡張して見れてたんだ」という感動もある
し。うん。だから意味ってあんまりなくていいんだとちょっ
と思ったりもした
白鳥：（笑）
高橋：なんか作品に対する意味って
白鳥：そうですね
高橋：「ただ、自分はそう見えているんだ」ということが、みんな
共有できるということは、こんなにうれしいことなんだとい
うのはね
三好：ね、たのしいですよ
白鳥：うんうん
三好：いかようにでも解釈できそうな、その自由さがね、「ああ、そ
れでいいんだ」というか。そこがすごくたのしいよね。鑑賞
していて、白鳥さんと見ているはずなんだけど、白鳥さんは、
あんまりしゃべってないじゃないですか
門：うんうん
三好：（気がつく）3人でしゃべっている。「ああ、でも後ろに白
鳥さんがいた」、みたいな
白鳥：（笑）。そういえば！
三好：その感じもいいなと思ってね

ビジュアル化を目標にしない白鳥流鑑賞

高橋：白鳥さんの頭の中でどう組み立てられているのかな？というの、すごい気になったりするよね…

白鳥：もう、俺はね、好きなどころだけ聞いてます。で、頭の中でやってるのは、聞いた言葉をビジュアルにするというのは目標にしてなくて、できるだけ言葉を拾うようにしていて、それをこう…自由にマッピングするみたいな感じで、頭の中においておくんですよ。平たく

一同：ふーん…

白鳥：で、その言葉だけじゃなくて、その作品に近づいて見ているのか？とか、その人の話し方の抑揚とか、そういうのも情報として加わって、で、できるだけ聞きとるようにしてて、それがつながったり、どこかが強調されたりみたいな

高橋：ふーん…

白鳥：そう。だからあの最初キュウリで、ニワトリで、みたいなやつ（堀口好輝《ビッグ・ベン》2022年）だと、3人あんまり共有してない場面もあったと思うんだよね(笑) もう、それぞれ…

高橋：バラバラのイメージ

白鳥：そうそう。それぞれの世界に入っちゃってるみたいな場面もあって。じゃあ、俺は、どこをとろうかな？みたいな(笑) だからいろいろ話が、話題がでると、その分選ぶ余地があるというのはおもしろいところではあります。はい

天羽：ふーん…

高橋：(タイトルは、) ビッグ・ベンでしたからね

三好：ビッグ・ベンですよ

高橋：いや、頭がち割られたような気がした

一同：(笑)

白鳥：ビッグ・ベンにはたどり着けないよね、なかなかね

三好：たどり着けないな～

白鳥：そこまではなかなかね

三好：でも(作品を見はじめた)一番最初ね、こうビルがあつてというふう…、建物ということね、ビッグ・ベンに近かったけど

高橋：ねえ

白鳥：そこが一番近かった(笑)

三好：そこからは、もうぜんぜん違う…

白鳥+門：フフフフ(笑)

…

高橋：通常、絵の鑑賞って、まあだいたいこう…私語厳禁的な、

白鳥：うんうん

高橋：静かにみんなで見るとい、まあだいたい一人で見るとか、そういうことが多かったけど…

白鳥：うん

高橋：ここまでしゃべりたおして情報共有してというのが、やっぱりすごい新鮮だった。で、なんとか白鳥さんに伝えようというの、だんだんこう…みんなに伝えようになってくる

白鳥：うん。そうそうそうそう

高橋：これが、すごいおもしろい

門：うんうん

三好：そうだよ。言葉にするってなかなか集中力もあるし、いろいろ自分の中にあるイメージを言語化するってけっこう難しく、それをなんとかしぼり出して、しぼり出して、おいてみると「ああ、そうだったよね」だったり、「あ、でもそうじゃないんじゃない？」だったり、その違いが、ぜんぜん違うものを見るなという感じが、すごい新鮮だよ

…

門：さっきの「曲が聞きたいよね」の話なんですけど。聞かないよさがあるんじゃないかな、って

天羽：うーん

門：だから伝えようとするけど、伝わらない感じ？

だから3人も、たぶんあのビッグ・ベンをうまく共有できてない、あの感じが絶好調というか

高橋：放射状にみんな違うことを

白鳥：(笑)

門：そうそう。好き勝手にたのしんでいるという

三好：玉ねぎも、なんだかぜんぜん、こう…、うまく着地できたんだか、なんだかよくわかんない

白鳥：ああ、そうそうそう！そうだよ！そうそうそう！

三好：あの黒い玉が何者なのか？

白鳥：あれは玉ねぎの衝撃の方が大きかったからね。あそこは

天羽：(笑)。そうですね。なんか着地できなかったという

白鳥：できなかったよね

天羽：「あれは玉ねぎだ」って言われても、(まだ)着地できなかった

いつまでも続けられるということ

高橋：この体験は、みんなした方がいいと思う

白鳥：(笑)

三好：した方がいいね。作品に対しての、理解できてるかどうかは別として、やっぱりそこに向かう時間の豊かさというか。こうやってね、おしゃべりしてるだけでも、ああ、みんなこんなに価値観が違うんだというのを共有していったりとか、見え方が違うっていうのをわかるのもたのしいし、自分が言っても別に誰もそれを否定しないし、「ああ、そういうふうに見えるんだね」「ああ、たしかに見えるかも」みたいな。「こうです」という答えのないものをずーっと、だからずーっと眺めてられるというか、ずっといつまでも会話できるというか。

高橋：たまたまここに来る前に SNS をずっと見ていたら、みんな言い合ってるわけですよ。違う、意見が違うことに対してこう人を否定したりとか、意見とか意識が違うことで、分断してたりとか。でも、こんなまったく違うことを言っても、意見も違うのに「なるほどね」とか「そうだよ」って、こう

理解しあえるって、ああ、すごいことだなと思って。うん。
あんなに罵り合ってる SNS の人たちがみんなこれやればいい
のに、と

一同：うーん

白鳥：あの…それ、あのたぶん俺が思った…最大の違いは、鑑賞で
やってるときは、関係性を終わらせようと思ってないんです
よ、みんな。だから結局、ものの見方とか作品の思いとか共
有できてなくても、話はやっぱり続けたいわけですよ

高橋：うん

白鳥：そうすると、否定したとしても、持ち返す力が働くというこ
とになるんですけど、えっと世の中でだいたい起きてるのは
関係性をつなげたいと思ってないんです

一同：うん

白鳥：(SNS の中では、) 叩きのめして勝ちたいとかさ。マウントと
りたいとかさ、あの、そういう方向にいつてるので。関係性
とか、話をずっとつなげたいと思ってやっているわけじゃな
いから、違うんだな～と思って

高橋：うーん、でもそれって一つのヒントですよ

白鳥：うん

高橋：まあ、世の中がちょっと分断しつつあるこういう時に、その
関係性を維持していくという意識をどこでもつかということ
が、こういうことを癒す方法でもあるのかな～なんて、う
ん。それを今回体験してみて、より理解が深まったという
か。よかったです

三好：そう、考え方の違いとか見え方の違いを、自分と違うから
「あ、それを理解したい」と思うというか

白鳥：うんうんうん

三好：隣の人との違いを理解して、「あ、僕にはこうしか見えないん
だけど、え、こういうふうに言ってる。え、それどういうこ
と？」というふうに、寄り添いたくなるというか

門：うん

三好：それで最終的に理解はできないかもしれないけど

白鳥：知りたいという気持ちがね…

三好：そう。その知りたいという気持ちがすごい…いい関係性を
つづけているなあ、というふうに

白鳥：うんうんうん

三好：思うよね

高橋：理解できなくても「そういう考え方なんだ」という、知れる
のはおもしろいですよね

白鳥：そうそうそう。だから、そう、作品に対してもさ、作品の何
かが理解できているというよりは、愛着がでるという方が、
俺は感覚としてはそっちに近いかな

天羽：うんうん

白鳥：だから、記憶に残るのは、「わかった」ということよりも、わ
かんないことのが記憶に残るんですけど、うん。それは愛着
に近い感じ

三好：今日見た作品とか、買いたくなっちゃいますよね

高橋：そう。俺もほしいとか

三好：ああ、これ持っていたいなって

白鳥：見ていたいということだよな？

三好：なんだろう？そこで過ごした時間が自分にとっても豊かな時

間だったから、その時間をつくってくれたこの絵を持ち帰
りたい

白鳥：ああ、それいいね。いいよね

三好：うん

白鳥：じゃあ今度、アートフェアで(笑)

三好：買えるところで

…

三好：俺は今日最初の音符のやつかナミナミのやつがすごい…

高橋：俺もナミナミのがほしいなー

白鳥：ハハハ(笑)

高橋：あれはずっと見てられます

三好：見てられるね

白鳥：ハハハ(笑)

白鳥：あの、ナミナミのやつはね、けっこうストーリーも多くい
っぱいできたもんね

高橋：うん

三好：このタイトルもわからないまま終わってるというのもいいよ
ね

白鳥：ハハハ(笑)

高橋：飛行機から見た、とか(笑)。プロペラに見える、みたいなの
うん、たしかにそう見えた

白鳥：いやー、その辺はおもしろかったなあ

白鳥：うん

高橋：なんかみんなで旅行した気分になりましたね

天羽：ああ！

白鳥：ハハハ！(笑)。そうね

高橋：ね。飛行機で飛んでみたし

一同：(笑)

高橋：畑を見だし、ビッグ・ベンも見だし

白鳥：ハハハハハ(笑)！

三好：空想の世界に行ったりして

白鳥：ああ、いいね。(たぬきだ shin 《蛇龍》制作年不詳)ドラゴ
ンもいたし

門：うん。はい、じゃあそろそろ

一同：はい。ありがとうございました。おつかれさまでした。

(拍手)

録音：小山友也、阪中隆文
書き起こし：宇野澤昌樹、編集：門あすか